

# 私の海軍生活

渡 邊 莊 さん

私は自分が軍人に向いているとも軍人になりたいとも思っていなかった。大学も文学部哲学科、嵐山の禅寺に下宿させてもらい、小僧さんのすることを真似していた。それが徴兵検査で第一乙種合格となり、セーラー服も愛らしい海軍二等水兵となった。

万事戸惑うことばかり。まず玄米食に強烈パンチを喰らわされた。この健康的な主食は昨今の圧力釜によるものよりずっと硬く、良く噛まないで腹をこわし、良く噛むと歯を痛める。私は腹の方を大切にしたので歯が痛くなり、病室に出頭した。軍医殿はしげしげと診察したあげく「貴様、歯はどこも悪くない。それが痛むのであれば、原因はどうやら耳にある。耳たぶの膨らみが怪しい。じっとしておれ。」と言って、私の左耳たぶの一部を切り取った。中には白い脂肪の塊があった。

ところが、病状は一向に改善されず、逆に頬が脹れてきて、他の軍医から「これはお多福かぜじゃ。」とされ、入室の憂き目をみることとなった。その後出会った時、例の軍医中尉は苦笑いしていた。この耳たぶの切り傷が海軍生活で受けた私の唯一の公傷である。

昭和19年2月、予備学生に任官し、同輩は横須賀に近い武山の学生隊に移動したが、私は流行性疾患の疑いありということで(のどが少し赤かった)、みんなと一緒に武山へは行っただが、その病室に入らねばならなかった。細菌培養の結果マイナスと判定されるまで出られない。ここでは食事の配膳は同じ入室者の若年兵が担当するが、兵長や上級水兵の飯はうず高く盛り上げられ、自分たちの食器にはその半分以上しかよそわない。陛下の赤子としてお国のために身命を捧げた者同士であるのに、実に異様な光景であった。学生隊での5カ月余りの基礎教程はしごきの連続、苛烈な戦闘が待っているのだから当然のこと。将校学生らしからぬ者がいるとて隊長から罵倒されたり、お互いに向き合ってビンタの練習をさせられたり、朝食前に吊床を担いで広大な営庭を駆け足さ

せられたり、あげればきりが無い。その頃同じ班のものと一緒に撮った写真を郷里に送ったが、どれが私か誰にも分からなかったという。まっ黒に日焼けした白い訓練服の若者ばかりなので。圧巻は真夏の炎天下、完全武装で分隊対抗の競争をさせられた。なんとこの凄惨な競技で我が八分隊は全学生隊12ヶ分隊で1位となったのだから呆れる。<sup>あき</sup>

次の術科教程では航海学校を選んだ。海原を自分の腕で船を操って行くなど男冥利に尽きるではないか。ところが、私が<sup>(10)</sup>六分儀で星の高度を測り、地球上の位置を計算している間に、戦況は深刻極まるものとなっていた。

歓呼の声に送られて郷里を出た頃から、南太平洋では死闘が続き、拠点は次々と奪われて劣勢は顕著となり、航校へ進む一週間前、7月7日サイパン島では玉砕していた。

サイパンから東京までは2,250キロ、丁度完成していたB29爆撃機にとって格好の空襲コースとなり、私が航校を卒業する1ヶ月前頃から頻繁に用いられ、その度に日本では焼野原が広がった。



12月25日、航校卒業で少尉に

任官したが、私は大竹の海軍潜水学校で特修科学生となった。他の多くの者と同じく実施部隊に配属されたかったが、如何せん、その頃水上を航走する艦艇は大半が失われており、水中を潜る船しか行き場がなかったわけ。

潜水艦はもはや船ではない。機械そのもの。機械の中に人間が入り込んで動かす。乗組員は全てベテランでなければならない。一人のちょっとしたミスが全員の死をもたらすのだから。

ここではもう一人前の士官であったので、待遇も格段に良くなり、外出したら岩国やおおはた<sup>(11)</sup>大畠で、物資不足の銃後社会でそこだけは酒肉のあった水交社別館で、したたかに飲食した。流行歌に造詣の深い戦友のノートから「幻の影を慕いて」とか「<sup>(12)</sup>祇園小唄」など<sup>ぎおんこうた</sup>

を写し、熱心に曲を覚えていた。

昭和20年4月、米軍は沖縄本島に上陸し、「戦艦大和」も徳之島沖とくのしまで海底に沈み、我々は最後の持ち場として、横須賀特攻隊付を命じられた。2人乗りの特殊潜航艇「海竜」に搭乗する。予科練から回ってきた可憐な一飛曹かれん<sup>(13)</sup>が艇付(14)。本土決戦に備えて水際で敵艦船撃滅が任務。もちろん「我々の生命と引き換えに」である。

8月4日、隊長から引導(15)を渡された。「舵かじを少しは振らせても良い。吸排気筒を出して露頭(16)しても良い。何百隻という船団の中へ突っ込むのだから目標はいくらでもある。安全解脱切片(17)を外し、レバーを引きさえすれば輸送船撃沈は簡単なことだ。その時まで

に事故で艇を沈めるなど絶対にあってはならぬ。」

8月15日正午、玉音放送があるから軍装略綬(18)<sup>(19)</sup>にて参列せよとの命令が出たが、あいにく二種軍装は洗濯に出していたので私は出席できなかった。私の海軍生活に終止符を打ったのはこの放送であった。英霊諸兄(20)<sup>(21)</sup>に合掌！

- .....
- 1 公傷...公務中に受けた傷。
  - 2 同輩...地位・年齢・身分などが同じくらいの人。
  - 3 流行性疾患...ウイルスに感染することで引き起こされる疾患。
  - 4 陛下の赤子...戦前、日本国民は天皇陛下の子供とされていた。
  - 5 しごき...厳しく鍛錬すること。
  - 6 苛烈...きびしくはげしいこと。
  - 7 罵倒...激しい言葉でののしること。
  - 8 吊床...吊り下げた寝床。ハンモック。
  - 9 営庭...兵営の中の広場。
  - 10 六分儀...60度(円周の6分の1)の円弧と小望遠鏡・2個の平面鏡からなり、天体の高度を測るのに使う器械。船の位置を測定するのに用いる。
  - 11 銃後...直接は戦争に参加していない一般国民や国内のことをさす。
  - 12 水交社...明治9年(1876)に創設された旧日本海軍高等官の親睦および研究・共済を目的とする団体。
  - 13 一飛曹...旧日本海軍の階級の一つ。一等飛行兵曹の略。
  - 14 艇付...乗組員。
  - 15 引導を渡す...死を逃れられないことを相手にわからせること。
  - 16 露頭...頭をむき出しにしていること。
  - 17 安全解脱切片...命中までは、衝撃を受けても爆発しない様、信管の作動を停めておく器具。

- 18 軍装...軍服を身に付けること。
- 19 略綬...勲章や記章の代わりに着用する綬（リボン）のこと。
- 20 英霊...死者。特に戦死者の霊を敬っていう語。
- 21 諸兄...同輩あるいは近しい先輩などに対して、敬愛の気持ちをこめていう語。